

雑事記(49)

盛丘 由樹年

今回は次の複数の文書により構成される。

探訪についてはこれまでのシリーズで書いているように、他の二つでは素朴な疑問や考え方をまとめてみた。

- ・ 戦争遺跡探訪(20)
- ・ ヒトの心得
- ・ 自分の存在

戦争遺跡探訪(20)

① 曾我丘陵 浅間山(2023/10/22) 神奈川県中井町

戦争末期日本軍は、連合軍が相模湾に上陸しようする作戦に備え、その周辺のいくつかの丘陵部に兵隊を配備し、防衛陣地を築いたことはおおむね知られていることであり、これまでの探訪記にもいくつかその痕跡を紹介してきた。

さらに、二宮町と小田原市の境界に位置する曾我丘

陵(特に浅間山、標高317m)に防衛陣地が築かれたという記録があり、私は10月22日(日)探訪に行った。以前にも曾我丘陵のハイキングコースを歩いたことがあり、古い時代の事物や横穴を見かけたが、戦争遺跡らしいものは何もなかった。今度はよく探してみようと思ったが、結局、戦争に関するものは何も見つけられなかったことを断っておきたい。紀行文的に、道すがらの見聞を書くことにする。

出発点は例によって中井町役場だった。ハイキングを兼ねて寄り道しながら、浅間山を目指した。松本地区と古怒田地区を通っていくコースを設定した。各集落では昔からの人々の暮らしがあつて、それらを横目で見ながら歩いてゆく。

途中の松本地区の泰翁寺は、きれいに整った寺だ。門構えなどに趣があり、さわやかさのある境内だった。かやぶき屋根のお堂が一对あるのが珍しい(修復中だった)。

境内の芝生に置かれた複数の石仏類に私は興味を持っていた。大きくはないにしても、風情があり、よくできている。ひとつは馬頭観音の石像で、三体がひとつに重なったようにみえる。一对の手を合わせて祈る姿に、木喰仏のような素朴さがある。

もう一つ、私の目を引いたのは石人像だ。標準的な姿かたちのもので珍しくないが、普通一対になってい



泰翁寺の石人像
背景にあるのは修復中のお堂の足場



泰翁寺、馬頭観音の石像

るものだから、単独にあるのは珍しい。もう一体はどこに行ってしまったんだろう、と心配してしまう。

泰翁寺を訪ねた後、やまゆりライン（近年新設された広域農道のようなもの）を歩き、古怒田へ向かった。

以前ここを通った時に、その道沿いの果樹園（主にミカン畑）の傾斜地に横穴があることが気になっていた。その時は通り過ぎたが、よく見たいと思っ

てみた。

これは、私の第一感で防空壕を思い浮べたものだ。少し奥まった位置にあるものの、入り口をレンガ積みで補強してあるので、目立つ。小さなトンネルのようにみえる。普段は入り口が板で塞がれているが、この日は開けられていた。その板は脇に立てかけられている。カギなどがかけられていないから、他の不審者が外したのかもしれないし、単に、風通しを良くするために、管理者が開けていたのかもしれない。ともあれ、覗くのにちょうどよかった。

狭い坑道をかがんで5メートルほど進むと、奥が広い空間になっていた。中で立ちあがれるだけの天井の高さがある。大きめのソフトボール大の球根のようなものが地面にたくさん敷き詰められていた。中には芽を出し、ひよる長い茎をのばしているものもある。こ

れらはコンニヤクイモというものだろう。つまり、農家の方がそれらを保存のために、この横穴を使用して
いるわけだ。



やまゆりラインの路傍にある横穴
農業用に利用されている。

もともとは、この地方の山間部に散見される古代の
横穴墳墓だろうし、入口のレンガ積みは後年に補強さ
れたものだろう。

古怒田集落に入ると、だいたいの家は複数台の車を

備え、余裕のある家屋を構えているが、古い農村の面
影がある。広い敷地に蔵や納屋をもつ家が多い。

道路わきの斜面に横穴が散見される。これらも農家
の地下貯蔵室として利用されているのだろう。中には
入り口が開けられたまま、ゴミ置き場になっていた。



かやぶき屋根の家
母屋の造りだが、人が住んでいるか
どうかは不明。

かやぶき屋根の家が一軒残っていた。これは珍しい。
驚くほどでもないのだが……。

古怒田地区を抜けると、比較的まっすぐな登り道になる。軽トラックが通れるほどの道幅がある。私は、その昔に軍が整備した道ではないかと想像してしまう。



仙元塔
何やら由緒のある石塔らしい。
高さは1.5mほど。近くにアートな
像もある。

道なりに上っていくと、「仙元塔^{せんげんとう}」への道しるべがあるの、それに従って登る。ほどなく無人の通信設備が見えてくる。この広くもない平坦地が浅間山の山頂であって、墓石のような仙元塔が中央にある。ダジ

ヤレのような名前が付けられている石塔だ。

仙元塔の説明書きの中に、ここが浅間山の頂上とのことが書かれているだが、ほかに山頂を示す表示がないから、はつきりしない。曾我丘陵の場合、その他の山にしても、不動山（曾我山）や高山も同様に、頂上地点が分かりにくい（ハイキングコースから外れたところにある）。「この辺だろう」の見当で、歩いてゆくしかない。尾根筋の農道のような道を歩いてゆくと、いつの間にか通り過ぎてしまう。

そしてこの付近に残っているかもしれない戦争中の陣地跡を、私は探してみたが、それらしい人工物はなかった。現在、山頂付近の通信設備がある区域内が一番怪しいのだが……。そこでは見晴しがよいから、陣地するには好適な場所だろうが、物的確証がつかめない。そのため、これを戦争遺跡として紹介するのは、私としてはやや心苦しいところがある。

この後、西へ進み、赤田地区方面へ降りてみた。こちらも全体的に牧歌的で、のどかなところだが（丹沢の遠景は絶妙）、歩いている途中で、どこからか、ブルドーザーのゴトゴト音（土木業者の作業場がある）や、野球練習の掛け声とバットを打つ音（ある学園の総合グラウンド）、ゴーカートエンジンのうなり音（カ

ートサーキット場）が聞こえてきたりした。

②探照灯陣地跡その1 (2023/11/13)川崎市麻生区
古沢

探照灯（サーチライト）は古い時代から、戦闘に欠かせない装具の一つだった。海上においても陸上においても、だいたい敵は夜の闇やみに乗じて近づいてくるものだから、それを照らし出し、反撃するために重要だった。

対して、旧日本陸海軍は夜戦を得意として作戦を遂行したものだ。しかし、第二次世界大戦では、日本軍が忍者のように忍び寄ったとしても、そんな作戦行動は敵に見破られ、射程距離に入ったならば、一斉にサーチライトに照らし出され、一斉射撃を受けて全滅させられたという実戦例が多い。

1942年8月にアメリカ軍は、ガダルカナル島の海岸に上陸し、建設中の日本軍の飛行場を奪い取った。これに対して日本軍は、それを奪還するために死力を尽くした。なかでも、日本軍の精鋭部隊・一木支隊いちきが夜に、深いジャングルを抜けて攻勢をかけようとしたが、近づいたときサーチライトに照らし出されて、たちまち壊滅したのが有名な話だろう。サーチライトに

照らし出されたら、いくら精鋭部隊でも銃砲の標的に
なるだけだった。ガダルカナルではその後も増援部隊
を送るなどして、激しい戦闘を続けたが、日本軍は、
補給が途絶え、命からがら転進せざるを得なかった。
この攻防戦は43年2月に米軍側の勝利に終わった。

昭和19年になると、日本の本土が本格的な空襲の
対象になったので、日本側でも対空用に探照灯を多用
した。探空灯とも呼ばれた。特に、首都防衛のために、
夜飛来してくるB29爆撃機を照らし出すために、高
射砲部隊とともに、周辺各地に探照灯部隊が配備され
た。夜の空襲では、探照灯で照らし出さないと、高射
砲も、迎撃に飛び上がった戦闘機も、敵の機影が見え
ないから、どうしようもない。1万メートルほどの高
高度を飛行する爆撃機に対しては、探照灯で照らせた
としても、迎撃するのは難しかった。

探照灯にはいくつ種類があり、大きく分けて固定
式ものと可搬式のものがある。高空を高速で飛ぶB2
9に狙いをつけて光を当て続けるという精密さも要求
される。

敵にとつて探照灯は厄介なもので、真っ先に攻撃し、
破壊すべきものだから、自身が狙われやすい。固定式

のものにしても、短期間に運用しただけで、その後、跡形もなく撤去した例もある。単にB29の飛行ルートを考えずに、設置したものかもしれない。

つまり、各地に設置されたという記録や証言があっても、遺跡として残っているものが少ないという事情がある。

なお現代では、レーダーなどによって探索する方法が主流となり、大光量の探照灯は必要性が少なくなっている。

私は11月13日(月)午前、「ここに探照灯基地があった」ことを示す石碑があると聞いて、行ってみた。石碑であって遺跡ではないけれど、どんなところに探照灯が置かれたか、行ってみるのも参考になる。

それは麻生区古沢の丘のふもとに石碑があるという。その場所は、小田急・新百合ヶ丘駅から西、約800メートルのところだから、わたしにとって比較的交通の便がよい。

古沢の交差点から丘陵部への道に入っていくと、ほどなく右側の傾斜地に石碑が見える。それより小さく古い道祖神の石柱と並ぶように置かれている。

設置についての由来は、石碑の側面や裏面に刻されている。「平成2年6月吉日 柿生郷土誌古沢編集委

員協力者」と1990年だから、比較的新しい。探照灯があったそばに置くべきだが、丘の上では、人の目に留まりそうもないから、仕方がないところだろう。



探照灯基地跡 (川崎市麻生区古沢)
その石碑の正面に
「平和の碑 探照灯基地跡」と刻されている

探照灯は海拔約70mの丘に据え付けられ、昭和19年9月より昭和20年8月17日まで使用されたと記録されている。

正確な位置は不明だが、丘の上のどこかだ。私はそ

の痕跡を探るために上がってみた。

ほとんど草木が生えているだけの丘の上だった、柵やロープで仕切られたところが多く、私有地であることの表示板があちこちに掲げられている。入られては困るようなところとは思えないが、この新百合ヶ丘周辺は近年特に開発が進んでいるから、山林といえども、高価な土地になっているのだろう。地権者は土地に対する執着が強いとみえる。『私有地』の看板は「ここはオレのものだ。はした金では誰にも渡さん！」と言い張っているかのようだ。

私は遠慮しながら見て回ったところ、送電線の鉄塔が建てられている一画が最も高い位置にあり、探照灯の据え付け場所として一番適していそう。そのすぐ下の斜面をよく見ると、横穴が木の根の隙間に隠れていた。土を掘っただけの簡単な作りのものだ。防空壕らしい。これは敵に攻撃されたとき、隊員がすぐに避難する場所として作られた可能性がある。つまり、探照灯基地があつた一つの状況証拠だろう。

③探照灯陣地跡その2 (2023/11/13) 川崎市川崎区・小田公園

私は11月13日(月)午後、新百合ヶ丘から登戸に出て、乗り換えて南武線經由川崎方面に向かった。尻手駅でかなりローカルな電車に乗り換えたことを特記したい。そして川崎新町駅で降りた。

その駅から小田公園へ歩いて行ったのだが、小田公園なら、鶴見駅からバスで行くのが一番便利だったかもしれない。

ともかく、小田公園に来てみると、この辺はずっと平地であることに、違和感があつた。丘の上に探照灯を据え付けたほうが、高空を飛ぶ航空機に光を当てやすいのではないかと考えたわけだ。平地であっても、当時は、高い建物などなく、ずっと見通しがよかつたろうから、ここでもそれなりに有効だったのだろう。

公園の南側の、子ども用の遊具がいくつかあるエリアに、それらしい円盤形の礎石(直径1mほど、コンクリート製だろう)がランダムに6個置かれていた。高さが30センチほどだから、来園者が腰かけるベンチ代わりに置き直したものかもしれない。

特に表示板はないが、これらが固定式探照灯の基礎に使われていたことは確かなのだろう。川崎市の広報のパンフレットで公式に説明されている。



探照灯基地跡（川崎市川崎区小田公園）
探照灯の台となったコンクリート部が6個
ほど置かれている

これらの石には二種類あるのだが、それぞれ具体的にどう使われていたのか、私にはわからない。探照灯本体だけでなく、部隊として備えられた機器があり、発電設備や、索敵の補助のための空中聴音機、通信機器がセットになって存在していたはずだから、それらを設置するための基礎部として使われたわけだろう。

帰りは、頑張って鶴見駅まで歩いた。鶴見川を渡っ

た時、大きく曲がりくねる鶴見川の川面の輝きが、夕日に反射して、なかなかのものだった。こんなところで釣りをしていた人がひとりいたことに、釣りを趣味の一つとしていた私としては興味深かった。「こんなところで釣れるの？」

④探照灯基地跡その3（2023/11/29）東京都稲城市小沢城址

稲城市の小沢城址にも探照灯基地跡があるというので、11月29日（水）私は訪ねてみた。小沢城址には、その近くの弁天洞窟や、よみうりランドの俳優群を訪ねた時に、ついでに登ったことがあるのだが、そこに探照灯基地跡があるとは知らなかった。そこは「稲田（菅）探照灯基地」と言われていたという。

小田急線・読売ランド前駅から歩いた。（ここから読売ランド入口までは1.5kmほどあるから、誤解を招きそうな駅名だ）

私は多摩美緑地とやらを抜ける最短ルートを通って歩き、小沢城址の城山ハイキングコースの東側の取りつき口（三沢川入口）についた。一般的には、西側の天神坂入口から登って尾根筋を縦走するのが本筋かもしれない。探照灯基地跡があるとされる見晴し台へ行

くには、三沢川入口から登るほうが近いのだ。
小沢城址のある丘陵は、最高点51.8mながら、急な斜面を持つ地形で、意外と険しい。上り下りの多いコースとなっている。小沢城は平安末期に作られ、戦国時代まで使われたそうだ。山城の一種であり、城というより砦に近い構造だろう。



探照灯基地跡（稲城市小沢城址）
ハイキングコース上の「見晴らし台」と呼ばれる場所で、探照灯基地を説明する案内板の文面を不審者が読んでいた

見晴らし台は、武骨な建設現場の足場で組み立てられており、

興味に欠ける。掲示された看板の説明書きによると、この周辺に探照灯基地が設置されたとしているが、それらしい地面の隆起・へこみがあるけれど、よくわからない。廃墟のようなものも見えない。

この説明板があることだけが、唯一の手掛かりだ。ここに探照灯基地があったことを頭の中で思い描くしかない。その後、私は小沢城址まで歩き、菅仙石方面に下った。

⑤ 米軍府中通信施設跡（2023/11/29）東京都府中市浅間町

当日、次に向かったのは、府中だった。まず、東府中駅から北へ歩き、浅間山（標高79.7m）に上った。ここもその昔、軍に関係したという情報があり、興味半分で訪ねてみた。

なだらかな丘が複数ある公園であって、低い草木が茂っている。よく手入れされているけれど、ところどころ切株が目立つ。一般人が散歩するにはちょうどよい場所だろうし、周辺には児童公園がある。

私としては、戦争遺跡のようなものは何も見つけられず、おもしろくなかった。ついでに寄っただけのことで、本命は、この公園の西側にある地域だ。

その一帯は。もともと、旧陸軍の燃料廠だったが、戦後アメリカ軍に接収され、北側に「府中通信施設」が設置された。南側には、現在「府中の森公園」や航空自衛隊航空総隊司令部がある。

航空自衛隊の正門付近の庭に、退役した軍用機（F104J戦闘機など）の実物が数機展示されているという情報があるのだが、今回、見に行くのは割愛した。自衛隊では見学を受け付けているから、機会があれば、訪問したい。広報の方にいろいろ説明してもらえるといい。ただし、見学には4人以上という条件があるので、ほとんど単独行動する不審者にとってはハードルが高い。

米軍府中通信施設は長年返還されずに残されていたが、2021年9月には、全面的に引き渡された。現在、そこは国有地として閉ざされた空間になっている。

私は、そのフェンスに沿ってその周囲を歩いた。フェンスで囲われた地域の中は、放置されたまままだほとんど、ジャングルのような樹木が密生している。

ここが通信施設として利用されていたことがわかるのは、通信用鉄塔（高さ107m）やバラバラアンテナが残っていることだ。2基のバラバラアンテナは巨大なもので、北北東の地平線方向に向けられている。そ

の方向は、運用が終わったものだから、意味がないかもしれない。これらは通信設備として再利用できるとは思えない。解体に関しては、日本側に任せられたのだろう。それなりの費用が掛かりそうだが、日本側の負担となるのだろうか。



府中通信施設跡
国有地内には入れないから、200m
ほど離れた外側から撮影した

それぞれの円盤の部分が直径14mあるという。ジャングルのような樹木の上に、飛び出している。これ

がよく見えるのは北側の、今は一般の住宅地になっている地域からだ。東側の慈恵院がある路地からも、その大きさが実感できるほどに見える。

その南側の一部区域は、府中市が管理している生涯学習センターや駐車場が新しくできていた。

その近くのところに、フェンス越しに異様に古いビル群が見えることに驚かされる。2〜3階建ての建物で、窓には鉄格子が取り付けられているから、かなり怪しい。今は廃墟になっているほどの古さがあり、旧日本軍が利用してものだろうか、と私は想像してしまう。

⑥ 洞窟砲台跡 (2023/12/1) 神奈川県大磯町

相模湾沿岸の防空陣地についてはこれまでもいくつか紹介してきた。最近、大磯の羽白山に洞窟砲台跡があることを知り、早速行ってみることにした。

ここを「羽白山洞窟式加農砲陣地」というのが正式な呼び名であるらしい。羽白山は標高111mで、大磯駅の北側に位置する低山で、一般の地図にはその名が載っていないからわかりにくいのが、探索の先人たちのレポートや映像(動画を含む)を参照して、私は場所を特定できた。近くに稲荷社があるという情報がヒ

ントになった。現地ですぐ探し回る手間が省けた。大磯駅から線路を渡る歩道橋を通り、曲がりくねった上り坂を10分ほど登っていく。ただし、迷路的な道であり、道しるべなどないから、事前に地図を持つていかないと、たどり着けない。



大磯町と相模湾
大磯町羽白山の中腹から見た景色。手前には東海道線の列車が走っている

私は詳細な「住宅地図」(この地図にも洞窟陣地跡は示されていない)を見ながら歩き、ほどなく目的地に

着けた。分岐点から一人が通れるだけのような山道に入ってゆく。

道すがら、こんな山の斜面にもへばりつくように、ところどころに住宅が造られ、住民たちがひっそりと暮らしていることを知る。駅から近いとはいえ、上り下りには一苦労しそうだ。住宅のいくつかは別荘かもしれない。

羽白山の中腹の奥まったところにそれがあつた。トンネルの入口のようなコンクリート構造物だつた。倒木があつたりして、周辺が荒れていた。「隠れた名所」であり、一般の人には近寄りが見たい存在だろう。しかしながら、簡単に見つけたことで、私としてはやや感慨が薄い。中をのぞくと、奥に狭い通路があり、かなりの長さで続いている。

陸軍はここに大砲を据え付け、敵軍が上陸するとき、沖から押し寄せせる敵船に向けて砲弾を撃ち放つつもりだつた。その前に、艦砲射撃や空爆で、徹底的に叩かれてしまうものだろう。一発撃つたら、百発返されたりして。

同様な洞窟砲台跡については、二宮町の吾妻山中腹あずまやまにもある。以前このシリーズでそれを紹介したことがある。公園として整備され、家族連れに人気があつて、

多くの人が訪れる吾妻山だけれど、ここも隠れた場所にあるから、一般の人の目にはとまらない。



洞窟砲台跡
大磯町羽白山

これらは、相模湾防空陣地として同列にあるものだろう。見に行くなら、いずれも自己責任を負う覚悟と踏み込むためのハイキング用品が必要だろう。

ヒトの心得

1. 初心を忘れるなかれ

初心と似たようなことで所信表明がある。所信表明は言葉で聴衆たちに示すが、初心は自分に対する言い聞かせであり、抱負であり、志こころざしである。志はおおむね高いほうがいいことになっている。他人に「志が低い」と言われては、心外なわけだ。

初心を新たに考える機会が、元旦にある。一年の計だ。神仏に祈る日本人は多い。年に一度、元旦に何かしらの抱負をいただくのが多くの人の習わしであり、先人の知恵かもしれない。神頼みは、実質的に自分に対しての願い事だろう。

学校に入学するとき、会社に就職するとき、結婚するとき、人生のそれぞれの節目は「初心」を考える、よい機会なのだ。式典で長話するような人の話は聞かなくていいから、自分の心の中でじっくりと抱負を考えたい。

2. 他人の悪口はつつしもう

外交やビジネスの場では、「悪口を言わない」のが鉄

則だ。社交辞令として、お世辞などを言うことが礼儀になる。そんな言葉に意味はないとして、「ウソだろう」と悪く思っただけはいけない。

自分へ悪口を言うのは、気が重くなるから、他人に言いたい。他人のうわさをするのは楽しいし、うわさ話で盛り上がりつつ会話が弾むかもしれない。他人の秘密をばらすようなことでなければ、容認したい。

人を批評する、評価することは時には必要なことだ。人をほめたたえたり、逆にけなしたりすることで、本音がでる。ただし、第一印象を語るのには、思い込みを言うだけであり、あてにならない。

注意のつもりで悪口を言っても、相手は理解せず、逆ギレするかもしれない。常識がないことに自分では気づかないものだし、反発するのは自分を正当化したいだけの人間だろう。相手は「テメーに言われたくない」と思っていると考えなければいけない。

3. 若者よ、損を厭いとうなかれ

損得の意識が強かった若いころの私は、経済的に損をする生き方はしたくなかった。晩年に、ある人は「恥の多い人生だった」と言っていたが、結局、私の場合、思いとは逆に「損の多い人生になりそうなこと」に、

やや落ち込んでいる。

何かを成し遂げることで、人生の意味を持つ。自分にできることをすればいいし、全然気が向かないことでも、やり遂げることに意義があると思いたい。

今、損しても、取り返せる見込みがあるなら、今の損は投資だ。小さな投資で、大きな利益が上がりれば一番いいわけだ。くれぐれも投資時期を見誤ってはいけない。

「損して得取れ」は商法の極意である。つまり、「損をしなければ、得を取れない」と言っている。世の中、その戦略が多くのケースに当てはまるから、念頭に入れておきたい。

なお、見返りを期待するようなことより、惜しみなくあげてしまうのがすつきりする。返礼品など期待しない。

4. 他人と張り合うなかれ

勝負ごととは自重したい。他人と張り合って優劣をつけることは避けたいし、自分と他人を比較するのもやぶなことだ。

人間は、他人と張り合う（優劣を競ったり、勝負したりする）ことに熱中しがちだ。けれど、勝敗は時の

運と思わなくてはならない。切磋琢磨するのは、若い時代にすべきであって、もう若くない者は達観して、他人との勝負にはこだわらない態度を取りたい。ゴースティング・マイウェイで行きたい。

自分の勝ち負けはともかくとして、他人同士の勝ち負けなど、もうどうでもよいことを、自分に言い聞かせておきたい。

「自分の子どもや孫の行く末についても、どうでもいい」という心境にもなりたい。子どもが成人したあとは、子どもが何をしてくれようとも、「親の教育が悪かった」などと非難される筋合いではないのだ。

5. ポーカーフェイスに徹する

感情は、顔に出やすい。視線の方向を変えたりすることは、関心が向いていることを示すから、相手に気取られると不都合な面がある。ムツとするような場合でも、能面のような表情が無難なのだ。

顔の表情は、言葉とは別のコミュニケーションのツールだけれど、率直すぎるのはよくない。「何を考えているのかわからない」と相手に思われることも戦術なのだ。

ただし、笑顔は、自分が不利な時に、笑ってごまか

すときに使えるかもしれない。日本人は愛想笑いが得意とされている。

負の感情を表に出すことは、相手に敵意を見せることであり、相手は身構えてしまう。攻撃の表情を見せるのは、ごくたまにでいい。自分が嫌われる覚悟をしながら、オニの表情をしてみせる。ただし、常識のない人に、オニの顔をして見せても、無駄なようだ。

6. 危機意識を持つ

最近「ガザには安全な場所はない」とニュースで伝えられていたが、日本の我々にしても、常に危険が待ち受けているものだ。「災害は忘れたころにやってくる」ことだし……。

自分だけでなく、保護者あるいは監督の立場にいるものならば、配下の者にも気を配らなければいけないのはもちろんである。

特に弱者は自衛しなければならぬ。あくまで自衛であって、他人を攻撃する側に回ってはならないだろう。危険が迫ってきたら、よければいい。かわせばいい。かわせなかつたら、自衛に失敗したことになる。

人は、危険に囲われている。身の回りには危険がいっぱいだ。そんな危険に対応しなければならぬ。危

険に対する対応が、常に求められる。危険に対する不安な気持ち「怖い」であって、危機が迫っていることを心が警鐘するものだ。

すべての危険を忘れるとき、ヒトはやすらぎをえるものかもしれない。世の中は安心安全を合言葉にして危険をなくそうとするが、危険の種は尽きない。犯罪、火事、交通事故、通信障害、原発事故、戦争、災害、地震、津波、噴火、台風、洪水、干ばつ、飢餓……。人類が生き残ってきたことには、先人たちのたいへんさがある。

危険と似たような心配事も多いし、その種は尽きない。個人的・身近なことで、病氣、負傷、老い（体力知力の低下）、死、別離、失職、貧困、破産、隣人・知人・上司の嫌がらせ、親族との反目……などがあるから、ヒトは基本的にいつでも安心できない。眠っていても、悪夢にうなされていたりして。

世界的に危惧されているものとして、気候変動がある。それらを考えると、常におどおどするしかない。

わざわざ怖い体験をするために、ホラー映画を見るに、映画館に足を運ぶ人は多い。そんな人の気が知れないのだが……。あるいはアクション映画（冒険・活劇）にしても、怖い場面が次から次に出てくるのが通例だ。

でも主人公たちは間一髪で逃れたりしてうまく切り抜けるのがミソだ。戦争映画では、銃弾が飛び交い、砲弾が破裂し、周りの兵士たちが次々に傷つき、死んでゆく。でも、それらは架空の世界だから、観客席にいれば、安心なことに気づかされる。「ここが映画館でよかつた」と思う。怖いのは映画の中だけであって、スクリーンから目を外せば、怖いものなした。現実のおだやかな世界に戻れるから、「安全な体験」なのだ。疑似体験だけだ。

危険は物陰に潜んでいる。水や食品に毒や化学物質が含まれているかもしれないし、寄生虫や蚊が皮膚などに這いよって取りつくかもしれない。目に見えぬ感染症や放射性物質が空気に漂っているかもしれない。でも、ヒトには耐性や治癒力があり、ある程度の抵抗力や免疫力があることを知っておきたい。

車を運転するとき、急に何かが飛び出してくるなら、とっさに急ブレーキを踏むことを頭に描いていなければならぬ。自分が加害者になってしまう危険がひそむ。取り返しのない事態になったとき、加害者のつらさは相当なものだ。

7. 自分の身は自分で守れ

人は、常に、何かしら危機意識を持って暮らしているものだろう。オドオドと、周囲を警戒しながら、あるいは、未来の状況を危惧しながら、生きているものだろう。そんな危機意識を忘れ去ることができれば、一番良い。それは心を抑圧するものだ。必要な危機意識をもつことはもちろんある。

特に車を運転するとき、車や歩行者にぶつからないように、信号を見落とさないように、あるいはルートを間違えないように運転する必要があるから、気が抜けない。車の運転は、メーカーが宣伝するような楽しいものではない。鉄道にしても航空機にしても操縦する側は同様だろう。子どものころにそれらに憧れでも、現実の厳しさに向かい合うことになる。

私は、必要だから車にときどき乗っている者だ。歩行者に一言いうと、夜の道を黒っぽい服装で歩いている人は、車からは見にくい。明るい色の服のほうが望ましい。事故が起きたとき、車の運転者は「見えなかった」と言い訳したくなるものだろう。

道を歩くときも同様で、あたりを観察しながら、目や耳の感覚を研ぎ澄ます。歩道を歩いているのに、後ろから追い抜いてくる自転車に対しては、どうしようもない。

街でスマホを見ながら、あるいは音楽を聴きながら歩く人の気が知れない。歩く先に対向してくる人がいれば、ぶつかるから、事前にコースを変える。なかには、相手もコースを変えてくる、ぶつかる方向に……。

危機意識は、おおむね未来に対して向けられる。危険を予知する能力によるものだろう。ただし、不確かな根拠で、恐ろしがつているのは、単に危機感とりたい。危機感では、あてにならない。

危機を見極めることには難しさがある。そんな確実性がなくても、対処することは必要だろう。大きな被害をもたらすものについては、とうぜん、万全の備えが必要だ。危機感を共有して、対処するのが賢いことかもしれない。意思決定者に危機意識が足りないこと、批判され、責任問題になることがある。災害に対して弱い（被害を受けやすい）ことがわかっているなら、防止策が求められる。危機的な状況があるのに、無視してはいけない。

8. 自国を防衛する

防衛に関しては政府の責任だろうけれど、個人の我々としても意識すべきことだろう。特に自民党の議員はそれを強く持っている、と私はみる。このところ、

防衛費をどんどん増額している。武力行使をちらつかせる複数の隣国を意識してのことだ。このところ、中国の艦船の、わざとらしい領海侵犯や、国籍を明示しない軍用機の、領海・領土への接近飛行が頻発している。国交のない北朝鮮からのミサイル発射（試射）に神経をとがらせてもいる。

そんな不安を持って生きるより、気楽に楽観的に生きるほうがよい、という考えもあるだろう。他国に侵略されたらどうしようという、そんな危機意識を持たないほうが平和的だ。しかし、どこかの国のように、宣戦布告もしないうちから、いきなり奇襲攻撃を仕掛けた歴史的事例もある。近年にあった例で、独裁的指導者が特別軍事作戦だと言い張って侵攻してくるのかもしれない。

危機を扇動して、騒ぎまくることは、迷惑になることがある。騒ぎまくった事例として、1960年の安保条約改定での反対運動があった。安保闘争は、異なる危機感のぶつかり合いだった、と思っている。この際、その概要を以下に示そう。

安保条約は軍事同盟であり、専守防衛をモットーとする精神など、どこ吹く風だった。アメリカに守ってもらいたい一心で、時の政府が強引に進めてしまった。

日本は敗戦によって武装解除されたから、政府の首脳陣は不安だった。もともと1951年にサンフランシスコ条約の時に、日米で安保条約が調印されていたが、1960年の安保条約改定では、相互協力的な意味合いを強くした。日本は有事の時、米軍に守ってもらおう代わりに、基地を提供し、アメリカ軍の軍事行動を後方支援するという同盟関係を強化する条約にした。

他国から侵略に対して日本政府はアメリカの軍事力に頼ろうとした。日本の各地の拠点が恒久的なアメリカの軍事基地化されるとともに、アメリカの戦争に協力させられる可能性が高かった。しかしアメリカ軍基地が日本にあれば、有事の際、真つ先に攻撃される恐れがあったし、アメリカの戦争に日本が付き合わされる(巻き込まれる)ことが予想されたから、そんな同盟関係に人びとが、それが一部の人たちにせよ、強く反発した。軍事同盟は、世界的に対立姿勢を強める傾向がある。核兵器の危険性が高まっていた時代でもあった。

第二次世界大戦に勝利してから、アメリカは戦争好きな国になってしまった。もともとは自衛本位で中立的な国であったはずだ。自分の兵力に自信を持ち、他国の紛争に介入することをやりはじめた。資本主義を

モットーとするアメリカが、世界に共産主義が蔓延することを恐れたことが根底にある。日本は、朝鮮戦争・ベトナム朝鮮では、兵站面(補給や修理、傷病者の療養)で実質的に協力してきた。特にベトナム戦争では、日本は爆撃機の発進基地にもなった。湾岸戦争でのイラクやアフガニスタンへの侵攻では、形式的ながら同盟国として軍事行動をしてきた。自衛隊を派遣したと自体が、その派遣理由の建前はどうかであれ、軍事行動だった。政府がそれを派遣とし「派兵」とは言わなかったことが、平和憲法の縛りのある日本の政府らしい言葉によるごまかしだった。

1960年前後「将来、日本はアメリカの戦争に巻き込まれてしまう」という、あのすさまじい危機感は今ほとんど消えてしまっている。その後改定時期が巡ってきてても、何事もなく、自動延長された。

若者たちがこん棒や火炎瓶を持ち出し、体を張って、完全防備の機動隊に立ち向かった、あの武力的闘争は何だったのだろうか、という空疎感を感じる。危機感を振り払うには、暴れるのが一つの方法だろうか。

騒ぎの中で、若者ながら部外者であり続けた私は、彼らが批判した「何もわかっていない部類」であることは確かなようだ。単に、体を張るような元気が私に

はなかった。

9・危険が身に迫るなら、身をかわせ

野球を観戦しているとき、実際にボールが飛んでくることがある。無防備で座っていて、成り行きを確認するようではいけない。ボールをよく見て、「自分のほうに飛んで来る」ことを予測しよう。

危険が近づいてきたとき、すばやく身をかわすことが、すべての極意である。

・ 相手が殴りかかってきたとき

・ 物が落下してきたとき、あるいは飛んできたとき
危険が予測されるときは、それに備える体制をとればいいし、必要なことだ。

ぼんやりと突っ立っていてはダメだろう。たとえば、自分は殴られることをしていないと思っても、相手が殴ってくることは常にあり得る。相手が興奮していれば、さらに要注意なのだ。それとなく身構える必要がある。自分を守る体制をとる必要がある。達人の極意だろう。「言葉でわからないなら、こうしてやる」とばかりに殴りかかってくるのが、人間なのだ。子どもでも大人でも、手を出してくると考えなければならぬ。

相手が何かを投げつけてくる場合、その動作を見極めたい。投げつけてきたとしても、だいたい命中しないものだけれど、そう思っていると当たってしまうのが世のならないだ。

顔や頭部を狙って、相手が手を出してきたとき、基本的に自分の手で防御したい。あるいは、その手が届かない距離に首を後ろに引くことだ。常日頃から、首を後ろに引く練習をしておく方がいい。とつさに身をかわす。身をかわすことは、ボクシングや剣道をはじめ、すべてのスポーツにおいて必要な動きである。

自分の存在

・ 自分は何者か

自分が何者かを知るためには、鏡を見ることが早いだろう。全身を映す鏡で、そこに映る人物が現在の自分だ。自分と向き合うことになる。自分が右手を動かせば、鏡の人物は左手を動かす。左右が逆になっているのはしかたがない。年月とともに容貌が変わっていくこともしかたがない。でも、やせたり太ったり脂肪分や筋肉量については、自分の意志で、ある程度か

えられる。

ヒトは通常、服を着たりして真の実態を隠している。擬態というものかもしれない。裸になれば、それは基本的に、直立二本足のサル姿だ。時にはその容貌が醜悪に見えて、変身したり着飾りたい衝動に駆られるものだろう。

生物学的に、ヒトとサルは近縁種だ。基本的にヒトは生物の一種であることに変わりはない。同じ哺乳類としてネズミにも近い。ヒトは頭部が発達して、思考能力や言語能力が高いことに特徴がある。その高さが地球環境に適してしまい、有史になってから大増殖した。それにより地球環境が変わりつつある。資源の枯渇や気候の変動も起こしている。

ヒトは群れをなし、社会的な文化・文明を発達させた。それぞれの個体には社会的地位があり、多種多様な職種に携わる。ヒトの社会には、競争もあるし争いごともあるけれど、建前として共存共栄を目指す。文明の恩恵にあずかれることは多大にあるが、その集団や民族において栄枯盛衰がある。

サルや動物には厳しい自然環境でも生き抜くたくましさがあるが、道具を持ったヒトにはかなわない。

・唯一の存在としての自分

自分が存在する。自分の周りで、世界が回っている。自分が世界の中心にいる感覚だ。

そして自他の認識をする。自分がここにいることは、他の人々はすべて他人だ。世界に何十億人の人がいようと、自分とはみな別人だ。自分と他人の差は限りなく大きい。

自分がいなければ世界は認識できない。「世界は存在しない」に等しい。認識されない世界は虚無というべきかもしれない。

自分は奇跡の存在か。「なぜ自分がここにいるのか」、「なぜこの人が自分なんだ」 「これは、ひよつとして奇跡的な事象ではないか」

・理性と感情

理性の思考と感情の衝動は、つねに勝負の場にある。心の中は葛藤がつきものだ。自分の行動を決める指令を発する場であり、理性と感情で揺れ動く。

感情が優位になる場として、スポーツがある。他人の競技で、他人が勝とうが負けようが、自分には関係のないこと、自分がチームの一員でもないのに、チー

ムの勝ち負けにこだわる。でも、その勝ち負けにこだわらないと、面白くないのも事実である。スポーツで中立であってはおもしろくない。

幻想でもいいから、自分がその競技に参加しているかのように、勝負の現実感を味わうことが面白い。実際には、見ているだけだから、あきらかに自分は部外者だけれど、自分がその勝負している当人になりきる、あるいはチームの一員になりきって、協力する形で参加することで、ハラハラドキドキしながら、勝負の行方を注視することに、おもしろみがある。虚無であったは、そのおもしろさを味わえない。たとえば、野球の試合ならば、どちらかのチームに肩入れしなければ、面白くない。人々は、ほとんど正当な理由もなく、どちらかのチームをひいきするものだ。ヒトが持つ競争心の表れだろう。

・世をはかなむとは、何なんだろう

書を読んだりすると「世をはかなんで死んだ」という記述に、ふと目がとまる。それは第三者から見た記述であり、死んだ本人が証言しなければ、本当のことはわからないはず。「あいつは世をはかなんで死んだらう」などというのは、推測の域を脱しない。

はかなんで死ぬとは、それは生きる意味を失ったということか。それなら、達観して死んだという解釈も可能だろう。一種の悟りかもしれない。はかないは、むなしに通じる。わびさびの境地だろうか。

気持ちを推察するに、当人は「オレの気持ちなどわかってたまるか」と叫ぶかもしれない、ドラマのシーンに、よくあるパターンだ。そう叫ぶのは、自分の気持ちを理解してほしいからであって、逆説的な言い方なのだ。

でも、その置かれた状況を考えると、その言葉の裏には、苦しい胸の内が透けて見える。苦しい現実を逃避するために、死を選んだという推測されるケースが多い。苦しい現実に、人は耐えられない。

・命の重さ

命の重さがときどき議論になる。でも、その尺度は主観的なものであり、あいまいにしき判定できない。命の重さを測る器具などはない。あまり重すぎる価値観には疑問が生じるところだ。

命とは、生きているという存在であって、存在に価値があるとは定性的であり抽象的な概念だ。

その人の責任の重さ、社会的な価値の尺度で測るこ

とがある。VIP (very important person) という言葉で政府の要人などに示される。でも、命の重さとは別な尺度だろう。また、人物の評価として、社会的な役割の重要度・影響力・業績・才能・資質がある。

法的な損害賠償などでは、経済的な価値(年収、見込まれる収入額)が基本だろう。それが一番現実的かもしれないが、経済的な価値で測るのは味気ない。

収入ゼロの人の立場は弱い。引退して働いていない人は、蓄えたもの(資産、年金を含む)で暮らしているとはいえず、買いつきそうにない中古品のごとく、みんなゼロ査定かもしれない。そんな人は居心地が悪く、自分の居場所も見つけられないかもしれない。病院へ行っても、高齢などを理由に、医者にまともに診察してもらえないことがあるらしい。

命を魂と呼ぶ言い方もある。魂は肉体の中にあつて、ヒトの本体というイメージだ。実際は本体ではなく、肉体の付属品、派生物に近いのではないか。

死んだら、魂が抜け出てしまうという考えがある。抜け殻としての肉体は、もう何の価値もない。機能しなくなった機械と同じで、ガラクタだから、むなしなものだ。そのままでは腐ってしまうから、多くは火葬に付される。もう魂が戻る場所もなくなる。

ちゃんと動く機械なら、使い道があるというものだろう。使い道がないなら、そこに存在するだけだ。ヒトの場合でも、存在するだけの価値があるだろうか。姥捨て山伝説のように、用済みだとして、口減らしのために、山に捨てていいものだろうか。

そこに「命の重さ」を見出さないと、存在が否定されてしまうものだから、命を肯定するために重さがあるようだ。命に重さがあるとするのは、思い込みに近い。しかしながら(どんな形の命であっても、切り捨てられる恐れがない)という安心は人々の間で必要なことだ。われわれは思い込みで生きているという実態がある。思い込みも捨てたものではないという理屈だ。

・価値観が多様にある

人によって価値観は異なる。個人の主観というもので、人によっては何の価値も見いだせないものでも、貴重だったりする。

この世がむなしい、と感じるのも、ヒトそれぞれだ。空疎、無、無常、という言葉が頭に思い浮かぶ。ものあわれ、わび・さびは、日本人の好むところだろう。

ニヒリズムは、虚無主義と訳される。形あるものが否定されてしまう。ニヒリズムの語義の中には、19

世紀、ロシアで「既存の体制など、ぶち壊せ！」と攻撃的になったりしたことをいうらしい。伝統的にロシアの皇帝は、他国に戦いを仕掛けては領土を拡大すること、人々に英雄扱いされてきた。それに反発する人が出てくる、「贅沢三昧のアイツらの道楽や気まぐれに、付き合っついていられるか！」

でも、ぶち壊すこと自体、無意味だったりする。威勢のよいヤローにあおられただけだったりするし、あるいは、屁理屈で理論武装したつもりの人物にマインドコントロールされただけのことだったりするのだが、閉塞感や虚無感から抜け出すためには、改革が求められたわけだろう。そして集団をまとめ上げるためには、指導者にはおそらく強いリーダーシップが求められた。人々は「なるようになれ」という気分だったか。

・自分の可能性にかける

「一人では何もできそうもないボクに、何ができるんだ？」ふと考えてみる。

「自分ひとりで生きていけるだろうか」

可能性を試すためのチャレンジもなかなかのものだろう。「あがいてみようか？」

そして他人（例えば父母）の期待にこたえられるの

か？ 「え？ 自分のためでなく、他人のためにか？」
むなしさが辺りに漂ってくる。

努力は、自分を厳しく律しなければならぬし、だいたい肉体的に苦しいし、精神的に追い詰められるものだ。達成したところで、ほとんど一時的な自己満足が得られるだけだ。途中で挫折して、自分の弱さを思い知るのが関の山だろう。

自分一人では何もできないという無力感。できない自分に生きたる価値なし、と思ひ込むことがある。

「あいつにできることならば、オイラにできないわけがない」というのは、思い込みだろう。あいつにできて、自分にはできないことは、たくさんある。「できなかった」という事実、何度も直面する。

あいつは楽々とパスするのに、自分は苦節の道を歩み続ける。他人と比べると、どうしても不公平さを感じる。不平等な世界に生きていることを実感する。はつきりとした実力の差を見せつけられる。

自分の将来のいばらの道が見えていると、足取りが重い。自分の得意技があつたとしても、こんなのが何の役に立つのだ。と懷疑心が頭をもたげる。

「こんなに努力しても、何になるんだ」

努力は苦しいし、むなししい。こんな苦行して何にな

るんだらう。鍛えられる？ 鍛えてどうするんだ？ 人に自慢できる？ 自己満足すれば、楽しいじゃないか、と言われそうだ。達成は自己満足のためか？

・ 生きがい

「じたばたしても、どうせ死ぬんだ、遅かれ早かれ」という原則は大きい。生物に課せられた宿命だ。虚無にもなる。

「人生はむなし」と考えるのは、ひとつの結論だろう。「できる、できない」は、もうどうでもよいことになる。

生物は死を本能的に避けるものであり、「死にたくない」から生きることが、りっぱな理由となりうる。死にたくないのに、死んでしまうことがあるのは、不本意だろうが、しようがないというケースもあるかもしれない。

生きるなら、おもしろおかしく生きたいという選択肢が出てくる。あるいは、「いいんだ、ボクは一人で生きるんだ」などと、ふてくされる気持ちになったりする。

「どう生きるべきかって？ 生きたいように生きればいいんだ。どうせなら、賢く生きたいよ」

これもほとんど開き直りかもしれない。

「ボクの生きがいは、何だろうか。生きがいもないのに惰性で生きていいんだらうか」と、「今のボクは、目先の雑事をかたづけただけだ。こんな仕事、オレにとっては雑事だ」

生きる張り合いがない、抱負も、目標もない、ことを感じる時があるらう。でも、ひとつの生きがいを見いだせる。「生きること」に生きがいを見出す。

「オレは会社の中で、歯車の一つだ」という思いがある。こんな小さなものでも、ひとつの歯車がないと会社は動かないという自負があったかもしれない。でも、会社をしばらく休んだときに、代わりの歯車はいくらでもあることに、気づく。むしろそちらのほうが調子よく回ったりして……。自分が必要とされない人であるに気づいたときに、がっかり感に沈む。

自分が組織や関係者に必要とされている人であることが、人生の華はななのだ。他人に期待されているうちが、華だ。

・ もう時間がない

「やるべきことをしていない」という、恐怖感に似た切迫感を持つたりする。そして「もう時間がない」と

焦る……。夜、寝るときに「このまま眠ってしまっ
いいのだろうか」という疑問がもたげる。

何かするにしても、〈もう時間がない〉という焦り
が付きまとう。時間との勝負がある。

「少年老い易く学成り難し」の格言、そのものだ。や
りたいことはともかく、「やるべきことをしたのか」
という疑問が頭をもたげる。一つ一つ日常の些細な雑
事をこなしていくしかない状況がある。夜、眠るとき、

「今日もろくなことをしていないなあ」と反省しつつ、
「このまま、やるべきこともせず、眠ってしまったって
いんだろうか。読みかけの本を読む予定ではなかった
か」「いいんです」と勝手に答えて眠ってしまう。あ
るいは「今日は疲れたから、もう眠ってしまおう」と
言い訳しながら、ふてくされて眠ってしまう。「今日
できることは、明日にしよう」と先送りするのが、楽
でいい。

・ いい加減な自分に

どこからか、「こんな人生、いい加減でいいんだ」
というささやきが聞こえてくる。すべての努力は結局、
水の泡と帰すことだから……。私はそんな声を若いこ
ろに聞いた記憶がある。そのとき、人生の重荷が軽く

なった気がした。それから半世紀以上がたち、いま振
り返って、いい加減に生きてきたとは、大きな声で言
えない。自分はそれなりの人生を歩んできたようにみ
える。一見まじめそうに……。

「こんなボクでも生きていいんですか？」「いい
んです」と自問自答する。